

- ① ・多職種の力を結集して、より質の高い医療を提供します。
パーキンソン病医療の新拠点が始動しました。
・新任のご挨拶
- ② ・退職のご挨拶

名古屋大学医学部附属病院

理念 ● 診療・教育・研究を通じて社会に貢献します。

- 基本方針 ● 1. 安全かつ高度な医療を提供します。 2. 優れた医療人を養成します。
3. 次代を担う新しい医療を開拓します。 4. 地域と社会に貢献します。

〒466-8560 名古屋市長和区鶴舞町65番地 TEL 052-741-2111 (代表)

<https://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/>

ホームページで「かわらばん」のバックナンバーをご覧いただけます



TOPICS ① 特集 多職種の力を結集して、より質の高い医療を提供します。パーキンソン病医療の新拠点が始動しました。

2025年10月、名大病院は「パーキンソン病総合医療センター」を開設しました。開設の目的や高度化する治療への対応、今後の展望について、センターの皆さんにお話を伺いました。



▲(左から)坪井 病院助教、勝野 センター長、竹下 看護師長

パーキンソン病の増加と治療法の複雑化に対応する拠点へ

脳の神経細胞が減ることによって発症するパーキンソン病。その症状は手足の震えや筋肉のこわばりなどの運動機能障害にとどまらず、うつ、睡眠障害、認知機能の低下、自律神経症状など、多岐にわたります。年齢が高くなるほど発症しやすく、日本では人口の高齢化に伴いパーキンソン病患者数が20万人を超えるなど、増加の一途をたっています。

その一方で治療法も進化し、従来の飲み薬に加え、脳深部刺激療法(DBS)や、胃ろうを用いた経腸液療法、皮下へ持続的に薬を注入する持続皮下注射法といった医療機器を用いた高度な治療が登場し、複雑化しています。そのため、一人ひとりの患者さんに最適な治療を提供するには、これまで以上に多科・多職種による連携が欠かせません。

そこで当院では診療科の枠を超えて、質の高い診断・治療を総合的に提供できるように、パーキンソン病に特化したセンターを開設しました。

多科・多職種が集結し、高度かつ専門的な治療を提供

当センターでは、診療の中心となる脳神経内科に加え、手術を担う脳神経外科、精神症状に対応する精神科、皮膚トラブルを診る皮膚科、胃ろうの管理を行う消化器内科、運動機能を支えるリハビリテーション科など、各科が密に連携。医師、看護師、薬剤師、理学療法士、管理栄養士、ソーシャルワーカーなど多職種によるチーム医療を進めています。

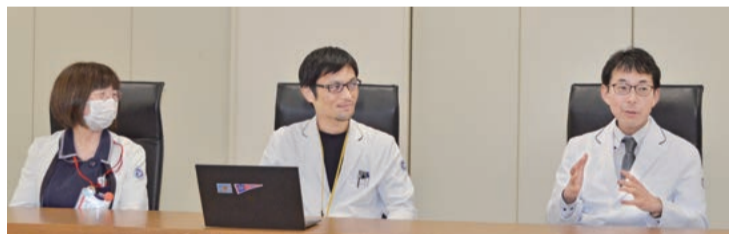
より円滑に連携し合える体制づくりのため、定期的なミーティングを実施するほか、コメディカル向けの勉強会も開催。多くのスタッフが熱意を持って参加し、知識と技術の向上に取り組みんでいます。また、地域の医療機関向けの勉強会などを開催し、情報発信にも力を入れています。今後は患者さんや市民向けの公開講座も企画し、正しい知識の啓発を図っていく予定です。

臨床研究を推進しながら、安心して療養できる地域づくりも

大学病院の使命である研究の推進もセンターの役割の一つです。現在は早期発見技術の確立や診断精度の向上、早期治療薬の臨床研究を進めるとともに、日本で先行している持続皮下注射法の実際の診療データ(リアルワールドデータ)を蓄積・解析し、最適な治療指針の世界への発信を目指しています。

パーキンソン病は長い経過をたどる病気ですが、適切な治療と管理を行えば、生活の質を維持することも可能です。例えば持続皮下注射法では、患者さんがご自身で注射や薬剤交換ができるように看護師が丁寧に指導し、ご自宅での療養生活を心身両面でサポートしています。

当センターが目指すのは、患者さんやそのご家族の不安を少しでも軽減し、安心して自分らしい人生が送れる地域づくりです。センターは医療スタッフだけでなく、一員として患者さんとも対話を重ねながら、一緒にこのセンターを育てていきたいと願っています。



新任のご挨拶

光学医療診療部長／病院講師 山村 健史

令和7年10月1日付で光学医療診療部長を拝命いたしました山村健史と申します。紙面をお借りしてご挨拶申し上げます。

光学医療診療部は消化器内科の内視鏡・超音波検査を行う部門です。

消化器内科は消化管や肝臓・膵臓・胆道などの腹腔内の臓器を広く担当しております。悪性腫瘍から機能性疾患まで多岐に渡る疾患の診断に内視鏡・超音波を用いた検査は必要不可欠です。また近年は内視鏡治療も盛んに行われるようになり、その役割はますます重要になっていきます。

検査は決して楽ではない場合がありますが、なるべく苦痛の少ない検査を行うよう心がけ、皆様の健康に貢献できるように努めます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



乳腺・内分泌外科長／教授 永橋 昌幸

令和8年2月1日付で、乳腺・内分泌外科長／教授を拝命いたしました永橋昌幸と申します。

当科では、乳がんをはじめとする乳腺の病気に加え、甲状腺・副甲状腺・副腎など内分泌臓器の病気の診療を行っています。乳がんに対しては、手術・薬物療法・放射線療法を適切に組み合わせ、質の高い治療を提供してまいります。甲状腺・副甲状腺・副腎の病気には、低侵襲で安全性の高い手術を行っています。



丁寧な説明を心がけつつ、患者さんに寄り添いながら診療してまいりますので、ご不安や疑問がございましたら、遠慮なくご相談ください。



退職のご挨拶



耳鼻いんこう科長／難聴支援・治療センター長／教授
曾根 三千彦

耳鼻いんこう科は、頭頸部領域（脳と目以外の頭部から鎖骨上までの部位）の多くの感覚器障害や同部位に生じた腫瘍の治療を担当し、その機能と命を守る診療科です。私の専門領域は耳疾患のため、聞こえの障害でお困りの多くの患者さんとお会いする機会がありました。在任中に難聴支援・治療センターを設立しましたが、治療後に聞こえの機能を回復され穏やかに日常生活を過ごされていらっしゃることは、私にとっても大きな喜びです。近年、難聴は耳だけの問題に留まらず、認知症とも大きく関わることで報告されています。片耳のみ聞こえにくい一側性難聴の問題についても、積極的な対応が検討されています。私の退任後も、皆様が安心して耳鼻いんこう科を受診できる体制は整っております。快聴な聞こえで脳も心もすこやかに過ごしてください。



循環器内科長／教授
室原 豊明

皆さん、こんにちは。循環器内科長の室原と申します。私は九州・阿蘇の出身で、平成14年から名大病院で世話になってまいりました。この度、3月をもちまして定年退職となります。24年弱の長い期間に渡り、皆様には大変お世話になりました。在職中は、名古屋大学の病態内科学講座の臓器別再編、国立大学の法人化など大きな改革があり、大学は自立して研究のみならず収益や人材も確保すべし、という無理難題の中を走ってきました。対外的にも東日本大震災をはじめとする数々の自然災害に直面し、全国的に災害医療のあり方が問われる事象が多発しました。直近では医師の再配置の問題や、医療経済（制度的に病院は黒字化されにくい）の問題もあり、大学病院は政策に翻弄される毎日です。このような中、私も循環器内科の研究や教育・臨床の発展に、少しでも寄与できたのではないかと思います。今後は外部の機関から見守りたいと思っております。名大病院のますますの発展を祈念いたしております。



呼吸器外科長／手術部長／移植連携室長／教授
芳川 豊史

この度、令和8年1月末日をもって退職となります。呼吸器外科の芳川豊史と申します。令和元年9月に名古屋大学医学部附属病院の呼吸器外科長に就任してから6年5か月の間、名大病院に来てくださった患者さん、共に働かせていただいた病院職員の皆様には、大変お世話になりました。ここに御礼を申し上げます。東海・中部地域の核となる名大病院に相応しい呼吸器外科を目指し、日々、診療、教育、研究に励んでまいりました。おかげさまで、1年間に500例を超える全身麻酔呼吸器外科手術、350例の原発性肺癌手術、300例を超えるロボット手術を行う全国屈指の呼吸器外科チームになり、令和7年には名大病院初の脳死肺移植も実施することができました。今後は、京都大学医学部附属病院の呼吸器外科長として、肺移植などの高度医療は名古屋大学と協同して行うなど、呼吸器外科医療の発展に尽くしたいと思っております。ありがとうございます。



メディカルITセンター長／病院教授
白鳥 義宗

平成26年1月に着任以来大変お世話になりましたが、本年3月末日で定年退職をさせていただきます。この間、患者さんの個人情報保護と同時にリアルワールドデータの活用が求められ、病院としては医療DXやさらなる高度なIT化が必要とされ、AI導入やスマートホスピタル実現という目標に向かって尽力して参りました。そのような取り組みを通じて、多くの医療IT技術者、また専門医を始めとするITに長けた医療者を育てることができたこと、進化したものと感じております。これも職員をはじめ多くの皆様のご指導・ご支援の賜物と感謝申し上げます。今後は当病院が、日本トップの医療ITをリードし、教育を担っていく施設として邁進していくことを祈念し、退任のご挨拶に代えさせていただきます。長い間、本当にありがとうございました。



検査部長／輸血部長／教授
松下 正

昭和63年の大学院修士課程入学以降合計33年間近く、血液内科医・輸血部長・検査部長として、出血性疾患・血栓症の診療、細胞治療機能の提供・管理、臨床検査の充実において活動させていただきました。本年3月に定年退職を迎えます。またこの間、副病院長・病院長補佐として、病院業務の品質向上・患者さんの安全を確保する世界基準の病院機能評価機構である Joint Commission International (JCI) の認証取得、電子カルテ管理室の責任者としての診療業務の品質に直結する電子カルテの機能向上に携わって参りました。これも輸血部・検査部・血液内科・電子カルテ管理室のスタッフはもとより院内のすべての職員の皆様のご協力があったはじめて取り組めたものと感じ感謝申し上げます。また担当させていただいた患者さんからは多くのことを学ばせていただき、ありがとうございます。皆様方のご健康とご多幸を祈念いたしまして、私の退任の挨拶とさせていただきます。



総合診療科長／病院教授
佐藤 寿一

私は今年度末を持ちまして名大病院を定年退職します。医師になって40年、そのうち33年を名大病院で過ごしてきました。総合診療科の前教授である伴信太郎先生が名大病院総合診療部に着任されたのが平成10年で、その頃はわが国の総合診療の黎明期でした。母校の名古屋大学がわが国の総合診療のリーダーを教授として迎えたという話を聞いて、伴先生が学生相手に開いていた勉強会に参加し、専門細分化が進み始めたわが国の医療の中における総合診療の意義を知りました。また、講義中心から実習主体のより実践的な教育を日本の卒前医学教育に導入するという活動理念に共感した私は、平成11年に名大総診の仲間に入れて頂きました。それから26年が経ちましたが、その時代で多くの先生方との出会いがあり、その中で自分も成長できたと感じています。来年度からは名古屋市近郊のクリニックで地域医療に貢献する所存です。今後ともよろしくお願いたします。



皮膚科長／教授
秋山 真志

この度、令和8年3月末日を持ちまして名大病院を退職いたします。私は、平成22年に、それまで約10年間勤めました北海道大学から名古屋大学に赴任いたしました。名大病院皮膚科での診療は15年半になります。近年はこのかわらばんの編集委員長も務めさせていただいておりました。当院にお通いの患者さんとそのご家族に教えられて、また、職員の皆様が助けられて診療して参りました。これまでの皆様のご支援に心より感謝申し上げます。名大病院の皮膚科は、膠原病の診療、皮膚悪性腫瘍の集学的治療、遺伝性疾患の遺伝子診断等、様々な領域において、日本の皮膚科医療をリードする皮膚科の一つであると自負いたしております。幸い、多くの大変モチベーションの高い、優れた若い先生方が皮膚科にはおりますので、安心して後進にバトンをお渡ししたいと思います。今後は患者さんの立場に立った医療を提供して参りますので、名大病院へのご支援をどうか、宜しくお願いたします。